

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370344

研究課題名(和文) ヨーロッパの文学・思想における未来選択の位相

研究課題名(英文) Aspects of Choices of the Future in the European Literature and Thought

## 研究代表者

尾方 一郎 (OGATA, Ichiro)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：80242080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：過去の文化を継承し発展させていく中で必ず課題となる未来選択について、ヨーロッパを主対象としてその要因とプロセスを分析し、その特性から根底にある歴史観・世界観を考察する目的に即して、過去の文学・言語学・哲学・芸術等の諸領域にわたって未来展望の様相を明確にし、現代における未来選択に際しての特徴の分析にまで拡大することができた。特に重要な倫理の問題については2014年刊行の言語社会研究科紀要で特集を組み多角的な論考や対談を公表する機会を得た。

研究成果の概要(英文)：“Choices of the future” has always been an inevitable course in the process of carrying forward the traditional heritage. Our project analyzes the causes and process that affected the choice decisions, focusing our investigation on the European culture. Through examining the features and their underlying world views and historical perspectives, this project has thrown light on the various aspects of future outlook on literature, linguistics, philosophy and arts in the past. Furthermore, applying the findings will make it possible when trying to analyze the features of the “choices of the future” at present. As an effort to release our diverse research results, several talks and discussion sessions concerning those important ethics issues have taken place, and articles published in our department bulletin GENGOSHAKAI (2014).

研究分野：ドイツ文学・文化史

キーワード：未来

## 1. 研究開始当初の背景

本研究のメンバーは、H21-23年度の科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究「ヨーロッパの文学・思想継承における歪曲の系譜」(研究代表者 古澤ゆう子)において、ヨーロッパの古代から現代に至る文学や思想の歴史的展開の中で、他地域からの多くの異文化要素の受容やヨーロッパ内での文化の継承がみせたさまざまな様相を調査考察し、正確な理解への方法論的志向の一方で必然的・偶然的になされた様々な誤解・歪曲の様相と、それが持つ生産的創造的側面と、深刻な文化的対立・軋轢を生む側面とをこもこも考察した。そしてこの研究を遂行する中で、誤解・歪曲が生じる決定的なターニングポイントにおいて人間が行う未来選択、およびその基盤となる歴史理解から生じる未来展望という局面に着目するにいたった。

18世紀末からのヨーロッパの近代主義は基本的に人間の理性に信を置く思想に導かれる形で世界の政治的・法的・経済的・文化的等々の諸制度やそれを支える「普遍的」な価値観を形成してきたが、1970年代頃からそうした近代主義の価値観に様々な角度から疑問符が付され、「大きな物語の終焉」(リオタール)が語られてきた。一方で1990年前後の東西冷戦構造の崩壊は世界をむしろより展望のきかないものとし、価値観が相対化し指針が不明確になる中で、環境・エネルギー・健康・安全などの社会的局面やメディア・思想・芸術などの文化面で、それぞれの個人が能動的に未来を選択するように迫られる機会は増大する一方である。こうした状況をふまえて、20世紀後半の「近代主義の終焉」論および、理性と合理的構造に全面的懐疑の念を向けたポストモデルネ議論を振り返り、批判的に検証することには意義があると思われた。もちろん、20世紀以後のみならず、ふり返れば古代のヘレニズム時代、中世の神学論争、近代初頭のルネサンスといった時代の転換点における未来展望のありかたに、現代との類似性と相異をさぐる作業も同様に重要であり、生産性に富むものと考えた。

## 2. 研究の目的

ヨーロッパの歴史文化事象のさまざまな局面での転換・変貌に注目し、文学、言語、思想などの文化的諸領域における、それぞれの時点での「未来選択」に関わる事例をとりあげ、その特性と傾向から未来展望に根付く歴史観・世界観を考察する。そして古代から近代に至る各時代やさまざまな思潮における未来選択のありかたが、前時代の文学的思想的継承を遠因としながらも新しい局面を開く、その未来展望のありかたと方向付けを解明する。

### (1) 歴史観の生成と歴史哲学

文化事象における未来展望は、当然のことながら歴史観と密接に関わることから、過去の

歴史を把握するとともに、未来像を描き出す歴史観の考察が必要である。その一例として、近代発展史観の代表ともいえるヘーゲルの弁証法をとりあげ、プラトンからそこへ至る系譜およびそこから現代へ至る系譜を再考し、ヘーゲル以後の歴史観を弁証法の系譜という観点から明確にすることを試みる。

### (2) 美学・芸術と歴史認識

人間の営みにおける芸術活動を歴史認識と未来展望の中心にすえ、美的ユートピアを構想することもある美学論、芸術論をとりあげる。哲学・文学・芸術それぞれの分野で諸時代において展開された美学論・芸術論の間に見られる種々の諸連関を再考することで、美学・芸術学固有の歴史認識および特有の未来選択の志向性を見出す。

### (3) 人間観、運命観、死生観

未来を展望・選択する人間のありように関する概念は、人間観、運命観、死生観に反映するが、本研究では例えば、成長発展物語(Entwicklungsroman)に注目する。人類社会の未来展望を選択する個々の個人の未来展望と将来選択を軸として成長発展を描く文学であるが、19世紀から20世紀にかけてこのジャンルが被る大きな変化を観察することで、現代において人間の未来展望・選択が直面している諸問題を明らかにする。

### (4) 選択と選択基準

ラテン語 *alternare*「交代させる」に由来する、独語等の *alternativ* が「二者択一の」の意味を持つことを念頭に置きつつ、ヨーロッパの文化的ターニングポイントにおける選択行為と選択基準について、改めて俯瞰的視点から考察する。二者択一は未来の方針選択を含意して、新しく選択されたものが改革を導く。宗教・思想・芸術様式・政治・社会・経済制度から日常言語そして生活様式にいたるまで、多方面にわたって継続か交代かの選択決定がされ、交代にあたっては代替物の選択がなされる。この選択のありかたを分析し、選択の基準となるものの特性と志向を考察する。

## 3. 研究の方法

全体としては、ヨーロッパの歴史文化事象の、様々な局面での転換・変貌に注目し、文化的諸領域におけるさまざまな時点での「未来選択」に関わる事例をとりあげ、そこに内在する歴史観・世界観を考察するという研究テーマに鑑みて、まず思想と文学における関連する図書資料(特に近現代の文学作品、思想・歴史論、社会理論、批評等) また新聞・雑誌さらには近年重要度を増してきたインターネットのような諸媒体において資料収集を行なったのち、個々の事例に関して未来選択の要素を抽出し、そこで作用する過去の継承を踏まえた歴史観・世界観、および革新的

なモメントについて分析・研究を進めていく。前項に記した(1)～(4)の項目に即して記せば、

(1) ヘーゲルの弁証法を、その源であるプラトンの哲学的対話 *dialektike* との比較から改めて検証する。また、紆余曲折を経ながらマルクスやガダマーの解釈学にも影響がおよぶヘーゲルの歴史観とその進展について、ヴィルヘルム・ディルタイ『精神科学における歴史的世界の構成』(1910)やニーチェの生の解釈学、生の哲学、さらにはヴァルター・ベンヤミンの歴史観念、フランクフルト学派のホルクハイマー、アドルノ、ハーバース等と比較しつつ考察する。

(2) たとえばニーチェ『悲劇の誕生』は、ヴァグナーの『未来の音楽』に洗脳された非学問的「未来の文献学」であるとして、ヴィラモヴィツ等の古典学徒から激しい攻撃を受けたが、芸術とくに音楽を「真にドイツ的」未来の中心におくニーチェの展望理念は注目に値する。かの「アポロンの」と「ディオニュソスの」の分類は、最新の古典学研究によればアリストテレス詩学における *Phronesis* (知恵) 概念に遡り、中世後期の *Duns Scotus* の *intuitio sensitiva* にも見いだせる知覚論 (= 審美論) の伝統に位置づけられる。そしてニーチェ自身は、慎重に距離をおこうと試みてはいるが、ドイツ・ロマン派、シュレーゲル兄弟、シェリング、シラー等の芸術論との密接な関係が、詳細な検討により明らかになると考えられる。

(3) 19世紀において若者が「理想的」人間への成長を目指す物語がいまだ可能であったとすれば、20世紀には発展の目標が明瞭さを失い、主人公が逡巡混迷を繰り返す様子が主筋になる。この変容を、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスター』やトーマス・マン『魔の山』等に基づいて考察するが、そのユートピア性の検討を要するムージル『特性のない男』なども比較に加え、また可能な範囲でゲーム・マンガ・アニメなどの現代サブカルチャー作品も比較対象とする。

(4) 例えば近年ドイツで進められるエネルギー改革に関しては、政治経済的側面から、すでに多くの研究がなされている。本研究も社会的な方面にも注目しながら、主に文化的背景に重点をおく。本研究の参加メンバーは、そのバックグラウンドからドイツ語圏を中心的対象とするものの、ロマンス語圏、古典古代や英米、さらに日本などをまたぐ研究を行っており、そうした比較の中からヨーロッパあるいはドイツ語圏の特性的傾向を見て取ることができよう。具体的には例えば、ヨアヒム・リッターに見られる、近代自然科学と技術革新を自然からの解放とみなす文明論への懐疑と、精神科学や芸術審美の重視など、また近代的自然観に関しては、ドイツ

古典派、ロマン派の詩歌・小説の自然風景描写と田園詩や牧歌の分析からも、新時代的技術や文明発展肯定と平行して、古き良き時代の自然への憧憬が歌い込められるという文学史的定説に対して、未来展望と選択に関わる問題として、再解釈、再検討をおこなう。

このほか、文学表現の革新のための小説の新しい話法の開拓と日本など他文化の文学の受容、統合ヨーロッパの多文化状況における言語の未来展望と選択、そして言語教育の問題などについても考察を行なう。他方で、本研究では時代、地域など研究対象の異なる研究者同士の情報・意見交換を積極的に行うことが重要であるため、この趣旨に基づいたセミナーやシンポジウムを開催して、分析の深化をはかる。

#### 4. 研究成果

(1) 現代に至るヨーロッパの思想の基盤をなすと考えられる古代ギリシアにおける未来選択の諸相を、アリストテレスの『倫理学』、ソフォクレス『オイディプス王』、『ソクラテスの弁明』等の作品にたどり、その特徴を確認した。人間行為の選択基準を、最高善「幸福」においたアリストテレスの知の一形態、意識的概念の普遍性と具体的個別的経験の媒介フロネシスと、ソクラテスの主知主義に「悲劇の死」をみるニーチェのアポロンのものとの相違は、偶有性を伴う判断である「直観」の正確性を疑うアリストテレスと、対象の初期的知である近代的「直観」概念の一形態をディオニュソスのものとして悲劇形成の重要要素とみなしたニーチェとの相違でもある。また、悲劇『オイディプス王』の主人公は、「父を殺し母と子をなす」との神話から逃れようとあやまち(ハマルティア)を犯し破滅を招いた。ソクラテスは、彼より「賢い者はいない」との神話の意味を、無知の知への要請と解し、賢者と称する人々に論戦(アゴーン)を挑んで、死刑判決を蒙った。神話を受けた2者の未来選択のありようを比較考察しその特徴を探った。(古澤ゆう子、善悪の認識——アリストテレスの「倫理学」とニーチェの悲劇論、および、アポロンの神話——ソフォクレス『オイディプス王』と『ソクラテスの弁明』に即して、参照)

(2) 17世紀ドイツの言語協会「実りを結ぶ会」は先行するイタリアの言語協会をモデルに、やや人工的な標準的ドイツ語の確立を目指した。フランスのパリのような中心を持たないこの2地域でのこうした努力、またライブニッツやガリレイによる、科学における俗語使用の提唱などに、「後進」地域における革新の並行関係を見出し、未来展望に際しての「後進」地域特有の視線を、言語政策を中心として検討した。(清水朗、17世紀の「実りを結ぶ会」とアカデミーア・デラ・クルスカ、参照)

(3) 1832年パリでのショパンの登場は、メンデルスゾーンやシューマンなどの先行する作曲家に大きな驚きをもって迎えられた。過去の音楽を深く学びつつ斬新な和声や詩情を發揮したショパンの音楽は、技巧の革新性の点でも突出していたが、クララ・ヴィーク（後のシューマン）の卓越した演奏により広く受容され、その名声を確立した。こうした例において、音楽分野の革新的ターニングポイントの諸相を、内在的要素にとどまらず当時の社会生活・世相を包摂したかたちで観察した。（小岩信治、文藝別冊ショパン、参照）

(4) キルケゴールの「反復」概念を詳細に分析することで、彼の未来観の特性を浮き彫りにした。「反復」「想起」「同時性」「再現」といった、時間に関わる抽象概念操作のあるひとつの哲学的典型が明らかになった。また、キルケゴールの主観性／客観性という概念セットに定位してすすめられるトーマス・ネーゲルの哲学的思索を検討した。ネーゲルの論は基本的にカント哲学の延長線上にあるものだが、キルケゴールの主観性／客観性をめぐる思考を現在に継承し未来に開いてゆこうとする興味深い試みでもある。ネーゲルを参照することで、キルケゴール哲学の現代的意義に光を当てることが試みられた。（藤野寛、『キルケゴール 美と倫理のはざまに立つ哲学』、『主観性／客観性をめぐる二つの思考——キルケゴール生誕二〇〇年に寄せて』、参照）

(5) 19世紀末から20世紀初頭のモデルネの時代、文学界では描写や語りの技法の洗練と革新が流行ようになっていたが、トーマス・マンはそこに身を投じるのを嫌った。彼は守旧的と見える形式によりつつ、様々な専門書をほとんど剽窃と言われかねないほど自由に引用することで、従来存在しないほど緊密な作品内世界を創出するという形で革新を行った。この例などにおいて、20世紀において「選択」の範囲拡張と多様性の発端、および現代における未来選択の混迷的困難につながる諸相を見てとれることが判明した。（尾方一郎、〈生表象〉の近代、参照）

(6) ともにクラシック音楽に造詣の深かったマックス・ヴェーバーとトーマス・マンを比較検討した。特にヴェーバー『音楽社会学』とマンによる音楽家小説『ファウスト博士』を詳細に読み比べることで、音楽という芸術に潜む始原的な矛盾とその発展の果ての未来に思いを致した二人の音楽観の継承および共鳴関係を明らかにした。（山室信高、音楽の理性（ラチオ）と魔性（デモニー）参照）

(7) 19世紀ヨーロッパ文学において登場した体験話法は重要な革新であり、その時点にお

いて未来における技法的選択肢を大きく拡大するものであった。「心的視点性」は、学際的な概念であり、絵画、映画、心理学、言語学、文学などにおいてと同様、言語学においても重要な役割を演じている。心的視点性とそれに基づく認知的原理が発語の根底にあって統御的機能を果たしていることに關し、ドイツ語の指示詞、体験話法、kommen、受動文、同格的（非制限的）関係文などはたらきを分析した。心的な視点の近さと直接性のダイナミクスが、言語運用にあたって前提となるミニマムな「世界観」とその都度転変を統御していることが観察された。（三瓶裕文、Psychische Perspektivität in der deutschen Sprache.参照）

(8) 現代の人間生活は、過去に全く例を見ないほどに映像媒体に大きく依存しており、それが未来選択に与える影響もまた多大なものがある。そうした中で、映像を見るという営為と、そこにおいて言語が果たす役割について原理的考察を行った。日常的なほぼあらゆる行為においてなんらかのディスプレイ機器が介在する現在、映像を見るという行為を人間生活において根本的にどう位置づけるのか、その選択はなお人間に任されており、その選択如何が、IT社会における人間の精神生活の未来を大きく決定するという認識に基づき、ベンヤミンを媒介としながら、西洋の伝統的言語論と現代映像論との接続を試みた。（武村知子、ULOGOS：映像一般と人間の言語、参照）

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

清水 朗、17世紀の「実りを結ぶ会」とアカデミー・デラ・クルスカ：ルター／マキアヴェリとライプニッツ／ガリレオの間の二つの言語協会、人文・自然研究、査読無、10号、2016、181-196  
<http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27833>

山室 信高、音楽の理性（ラチオ）と魔性（デモニー） マックス・ヴェーバー『音楽社会学』からトーマス・マン『ファウスト博士』へ、経済論集、査読無、41巻2号、2016、137-155、

武村 知子、ULOGOS：映像一般と人間の言語、一橋社会科学、査読無、7巻別冊、2015、191-214

小岩 信治、ショパンのピアノ協奏曲「室内楽版」 1990年代からの録音史概観、言語文化、査読無、51号、2014、79-85

古澤 ゆう子、善悪の認識 アリストテレスの「倫理学」とニーチェの悲劇論、

言語社会、査読無、8号、2014、37-48

藤野 寛、主観性／客観性をめぐる二つの思考 キルケゴール生誕二〇〇年に寄せて、思想、査読無、1069号、2013、2-6

〔学会発表〕(計 10 件)

山室 信高、ドイツ語はどんな言語か その国際的地位と標準語の地位、個人的経験を交えて、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科「言語コミュニケーション1」, 2015年6月19日、立教大学(東京都・豊島区)

古澤 ゆう子、プラトン『ポリテイア』における詩的正義の可能性とホメロス叙事詩、日本独文学会秋季研究発表会、2014年10月11日、京都府立大学(京都府・京都市)

Hiroshi FUJINO、Wiederholung als eine neue Erfahrung - ein Paradox、Kierkegaard-Symposion、2014年08月02日、Hildesheim (Germany)

三瓶 裕文、心的視点性と自由間接話法の機能について ドイツ語の場合、日本フランス語学会、2014年05月24日、お茶の水女子大学(東京都・文京区)

橋本 喜代太、武村 知子、森田 敏生、文書スタイル再考 見栄えと意図、電気学会／情報システム研究会、2013年05月24日、機械振興会館(東京都・港区)

〔図書〕(計 7 件)

Hirofumi Mikame、Helmut Buske Verlag、Psychische Perspektivitaet in der deutschen Sprache. Eine kognitiv-linguistische Untersuchung、2016、255

尾方 一郎他、水声社、<生表象>の近代、2015、496(360-377)

藤野 寛、岩波書店、キルケゴール：美と倫理のはざまに立つ哲学、2014、286

古澤 ゆう子、尾方 一郎他、風間書房、ことばと文化の饗宴 西洋古典の源流と芸術・思想・社会の視座、2014、268(3-18,81-97)

小岩 信治、河出書房新社、文藝別冊シヨパン、2014、208(86-95)

川島 重成、茅野 友子、古澤 ゆう子、安村 典子、並木 浩一、河島 思朗、佐野 好則、金沢 正剛、ピナケス出版、パストラル 牧歌の源流と展開、2013、

285(11-21,55-91)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾方 一郎 (OGATA, Ichiro)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授  
研究者番号：80242080

(2) 研究分担者

古澤 ゆう子 (FURUSAWA, Yuko)  
一橋大学・名誉教授  
研究者番号：00173534

三瓶 裕文 (MIKAME, Hirofumi)  
一橋大学・大学院法学研究科・教授  
研究者番号：40127402

藤野 寛 (FUJINO, Hiroshi)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授  
研究者番号：50295440

久保 哲司 (KUBO, Tetsuji)  
一橋大学・大学院社会学研究科・教授  
研究者番号：90170026

清水 朗 (SHIMIZU, Akira)  
一橋大学・大学院法学研究科・教授  
研究者番号：30235642

武村 知子 (TAKEMURA, Tomoko)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授  
研究者番号：60323896

小岩 信治 (KOIWA, Shinji)  
一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授  
研究者番号：90387522

ラルフ・デーゲン (DEGEN, Ralph)  
一橋大学・大学教育研究開発センター・特任准教授  
研究者番号：20387591

山室 信高 (YAMAMURO, Nobutaka)  
東洋大学・経済学部・講師  
研究者番号：30755236